

労働組合は社会を変える力がある

東京公務公共一般が旗開き

1月21日、東京公務公共一般労働組合（公共一般）は東京で2024年旗開きを開催しました。旗開きは、オープニングとして歌声グループ「コールラパス」の合唱から始まり、公共一般の齋藤誠一委員長があいさつしました。

齋藤委員長は、新年早々に発生した能登半島地震と羽田空港における航空機衝突事故に触れ、災害の犠牲者を哀悼しました。同時に、二つの事故が公務員の削減、公共機能の民営化・市場競争原理拡大の結果として災害防止、災害への対応機能の弱体化の問題を明らかにしていると指摘。「公共を取り戻す」たたかいに取り組むことの重要性を訴えました。

引き続き、東京自治労連の安田直美書記長、東京法律事務所の青龍美和子弁護士（東京法律事務所）、山添拓参議院議員（日本共産党）、米倉春菜都議会議員（日本共産党）が来賓のあいさつを行いました。

あいさつの中で、青龍弁護士は平和憲法を形骸化して有事体制が強化されていることに警戒を訴えました。そして、YouTube 動画「四谷姉妹」で東京法律の岸、青龍弁護士が漫才師に扮して政治と平和の問題を解説していると紹介しました。動画リンク [四谷姉妹 - YouTube](#) をご参照

山添議員は自民党の裏金問題は政治をゆがめる大きな問題として、真相を明らかにしてゆがみをただしていくと決意表明し、米倉都議は労働組合に入ろうとする若者が出てきて、労働組合がストライキにたちあがるなど世の中を変える動きが始まっていると話し、決意を表明しました。

首都圏青年ユニオンの原田仁希委員長が「労働組合は社会を変える力がある」と訴え「年明けからの能登半島地震、羽田空港の事故があったので、恒例の「乾杯」ではなく「ガンバロー」の声をかけますと呼びかけ、グラスを手に全員で「今年もガンバロー」と唱和しました。その後、他団体からのあいさつ、公共一般各支部の紹介が行われ、東京争議団の諏訪幸雄事務局長は争議をたたかっているが、公共一般や青年ユニオンも争議をたたかっている。一緒にたたかっていきたいと表明。各支部の紹介では、「私たちは名前ではなくパートさんと呼ばれ、黙っていたら労災の補償も受けられない。だから声を上げようと組合に入りました」など組合員の様々な声が出されました。

オープニングで合唱を披露する「コールラパス」

